［論　文］

ヤングケアラーの啓発のあり方に関する研究
－中学生の調べ学習における成果発表の分析から－

Research on how young carers should be enlightened
From an analysis of junior high school students' presentations on their investigative learning results

松本　理沙

要旨

本研究では、ヤングケアラーの啓発のあり方を検討するため、中学生が取り組んだヤングケアラーをテーマとする調べ学習の成果発表から分析を行った。その結果、事前学習における調べ学習の内容の設定、ヤングケアラーを憐みの対象と認識しないようにする方法、成果発表のグループ間での相互理解及び共有のあり方等に課題があった。今後、ヤングケアラーの当事者の声を踏まえながら、継続性のある啓発のあり方について検討する必要がある。

キーワード：ヤングケアラー（young carers）／啓発（enlightenment）／調べ学習（investigative learning）

Ⅰ．研究の背景と目的

本研究は、ヤングケアラーの啓発のあり方に関する一考察である。ヤングケアラーに法令上の定義はない。本稿では、ヤングケアラーを、一般社団法人日本ケアラー連盟ヤングケアラープロジェクトによる「家族にケアを要する人がいる場合に、大人が担うようなケア責任を引き受け、家事や家族の世話、介護、感情面のサポートなどを行っている、18歳未満の子どものこと」と定義する。

2020年度に実施された中学２年生・高校２年生を対象とした全国調査では、ヤングケアラーの認知度について、「聞いたことはない」と回答した割合は、中学２年生で84.2%、高校２年生で86.8%といずれの学年も８割以上を占め、「聞いたことがあり、内容も知っている」、「聞いたことはあるが、よく知らない」がどちらも１割未満となった（三菱UFJリサーチ＆コンサルティング 2021）。そのような背景等から、国は、2022年度から2024年度までの３年間をヤングケアラー認知度向上の「集中取組期間」としている。広報媒体の作成、全国フォーラム等の広報啓発イベントの開催等を通じて、社会全体の認知度を調査するとともに、当面は中高生の認知度５割を目指すとした（厚生労働省 2021）。その影響だと考えられるものとして、例えば、2022年度に実施された石川県のヤングケアラー実態調査では、認知度について、中学２年生が「聞いたことはない」と回答した割合は61.4%、高校２年生の同回答は49.4%の結果となり、いずれも認知度が向上していることが伺えた（石川県 2022）。

しかし、ヤングケアラーという言葉の認知度が向上するだけでは不十分である。先述の石川県の実態調査において、自由記述の中に、生徒の間でヤングケアラーへの認識に差があることを浮き彫りにする記述がみられた。例えば、「一概になくそうとするんじゃなくて話をちゃんと聞いたりしてから本人がどうしたいかを大切にして欲しい」（中学２年生）という意見がある一方で、「そんなこどもたちが減ればいいと思う」（中学２年生）、「ヤングケアラーをなくすためには、行政が動くべきだと思う」（高校２年生）という意見もみら

MATSUMOTO, Risa
北陸学院大学　教育学部　幼児教育学科
主要担当科目　子ども家庭福祉論Ⅰなど

れた。ヤングケアラーがケアに至った背景、ケアに対する思いは様々である。その背景を踏まえず、ヤングケアラーをなくす／減らすという思考に至ることは、ヤングケアラーの存在を否定し、差別することに繋がりかねない。ヤングケアラーという言葉だけが独り歩きすることなく、ヤングケアラーの当事者に望まれる形で周知されることが必要である。

ヤングケアラー支援施策の先進自治体では、啓発活動も実施されている。例えば、埼玉県では、2022年度からヤングケアラーサポートクラス事業として生徒や教職員を対象とした講演等が実施されている（埼玉県 2022）。しかし、その講演を聴いた生徒の中でヤングケアラーに関する理解がどのように変化したのか、その実態を把握することは難しい現状があると考えられる。ヤングケアラーに対し周囲の理解が乏しい場合、ヤングケアラーの当事者が同級生や先輩後輩、学校関係者等との間に壁を感じ、人間関係を構築しにくくなり、学校生活を安心して送れなくなるリスクが高まる。

本稿では、筆者が関わった、中学校におけるヤングケアラーをテーマとした調べ学習を取り上げる。中学生が自らヤングケアラーに関する調べ学習を行うことにより、ヤングケアラーについてどのように理解が深まるのかを考察し、ヤングケアラーの啓発のあり方について検討する。

Ⅱ．研究方法

１．研究対象

本研究では、北陸学院中学校の全校生徒による、2023年度のミッション祭（文化祭）において発表された調べ学習の成果物を分析する。同中学校は、キリスト教教育に取り組んでいる他、「自ら考え、学びに向かう力」を育てるために、独自の探究学習を導入している。教材や文献、フィールドワーク（校外学習）などを通して情報収集をし、自分が考えたことをまとめ、発表し、評価をし合っている。これらの学習を通して、次世代を担うために必要とされている思考力、判断力、表現力を培うことを目的としている。

北陸学院中学校生徒会の発案により、2023年度のミッション祭（文化祭）のテーマが「幼き介護者～深めようヤングケアラーへの理解～」に設定された。背景には、2021年度の「第67回青少年読書感想文全国コンクール」において、「中学生の部」の課題図書に、ヤングケアラーが取り上げられている『with you（ウィズ・ユー）』（濱野京子著、くもん出版）が選定されたこと等がある。同中学校生徒会において、ヤングケアラーについての知識を深めたいという思いが強まったという。

２．調べ学習の方法及び時期

筆者は、2023年７月、事前学習の位置づけで全校生徒を対象としたヤングケアラーの基礎知識に関する講演を45分間実施し、生徒が夏期休暇中に行う調べ学習の助言を行った（事前学習の内容は後述）。

調べ学習では、６つの班に分けられた。各班には、中学１年生、２年生、３年生の各学年の生徒がいて、１つの班につき、計16～17名が配置された。各班で調べ学習の大枠のテーマ設定がなされ、班の中で取り組むテーマ毎に３～４グループが構成された。１グループにつき３～６名に分けられた。

夏期休暇中、グループ毎に調べ学習の取り組みがなされた。同年９月のミッション祭にて、ポスター形式での成果発表が掲示された（図１-１、図１-２、図１-３）。ミッション祭の参加者が自由に閲覧できる状況であった。成果発表は１つの教室でなされ、教室の壁面や持ち込まれたボードに掲示された。

図１-１　成果発表の様子
（2023年９月１日筆者撮影、個人情報加工済）

図１-２　成果発表の様子
（2023年９月１日筆者撮影、個人情報加工済）

図１-３　成果発表の様子
（2023年９月１日筆者撮影、個人情報加工済）

３．調べ学習に対する事前学習の内容

筆者より、「ヤングケアラーを理解するためのヒント」と題し、次の内容で講演を行った。

はじめに、事前学習の目的として、３点を提示した。１つ目は、ヤングケアラーとはどのような状況にいる子どもで、周囲から気づかれにくいことや、話を打ち明けにくい理由や背景があることを知ってほしいことである。２つ目は、ヤングケアラー一人一人の体験は異なり、同じようにみえる体験でも、人によって考え方、気持ちが違うことを知ってほしいことである。３つ目は、保育・教育の現場においても、ヤングケアラーを理解し、サポートすることのできる環境づくりが求められることを知ってほしいことである。

次に、ヤングケアラー（子どもケアラー）及び若者ケアラーについて、一般社団法人日本ケアラー連盟による定義を示した。今回の調べ学習ではヤングケアラーがテーマであるが、ヤングケアラーが抱える課題は18歳以降も継続する場合が多いこと、18歳を超えてからケアが始まる場合があることについても説明した。ヤングケアラーに関するよくある質問として、「若年介護者」等ではなくカタカナの表現が使用されている背景や、「ケア責任を引き受けること」と「お手伝い」の違いについても解説した。さらに、ケアラーの存在や家族をケアすること自体が問題なのではなく、子どもにケアする権利あるいはケアしない権利の選択が保障されているか、子どもの権利条約に基づいた保障されるべき権利とのバランスが取れているかが問題となることを説明した。

その後、ヤングケアラーとケアの対象者との関係、ヤングケアラーが担うケアについて具体例を示した。ヤングケアラーの事例として、TBS NEWS DIG Powered by JNNのYouTubeアカウントで公開されている「【ヤングケアラー】～声を上げにくい日本の現状～編【報道特集】」（https://www.youtube.com/watch?v=Lp40KI4fIQ0）という４分32秒の動画を上映した。この動画を選定した背景には、動画の中で、ヤングケアラーの当事者の体験や思い、当事者の思いを発信する活動の様子、イギリスがヤングケアラー支援の先進国であることに言及されており、比較的短時間でまとめられ、限られた講演時間の中でも使用しやすく、調べ学習のテーマ（後述）を提示する上で適切だと判断したことにある。

さらに、ケアラーが増えている背景として、少子高齢化の進行、障害のある人の増加、家族の人数の減少（三世代同居の減少、きょうだい数の減少、ひとり親家庭の増加）、共働きの増加等を提示した。ヤングケアラーが見過ごされやすい理由として、ヤングケアラーの考え方や気持ちによる理由と、周りの人たちの捉え方による理由に分けて説明を行った。子どもの権利条約において、ヤングケアラーの子どもたちが侵害されている可能性のある権利について具体的内容を示した。さらに、ヤングケアラーをサポートする人や機関についても例を示した。

最後に、講演を聴いた今、考えてもらいたいこととして、次の４点を提示した。１つ目は「ヤン

グケアラーのことをどう感じましたか？」、２つ目は「友達として、何ができるでしょうか？」、３つ目は「もし保育や教育の現場で働いていたら、何ができるでしょうか？」、４つ目は「自分が当てはまるとしたら、どうしますか？」である。

以上の内容を踏まえて、これから調べ学習において取り組んでもらいたいことについて例示した。これらの内容は、中学校の担当教員から、例年の学習内容等も確認した上で設定している。生徒には、下記に挙がっていない内容でも問題ないことも伝えている。なお、１つ目及び２つ目の例示については、今回の対象である北陸学院中学校が石川県金沢市に立地するために設定したものである。

ヤングケアラーについて、

・石川県ではどのような取り組みを行っていますか。
・金沢市ではどのような取り組みを行っていますか。
・他の県や市の取り組みと比較してどうですか。【参考】埼玉県、神戸市
・海外では、どのような取り組みを行っていますか。
・海外と比較して、日本の取り組みはどうですか。
・元ヤングケアラーだった人（20～30代）は、自分の体験をどのように感じていますか。
・ピアサポートグループの取り組みには、どのようなものがありますか。

その上で、石川県のホームページを例に、石川県ヤングケアラー実態調査の概要の掲載箇所を伝え、金沢市内の取り組みとして、ヤングケアラーをテーマとした金沢市主催講演会の案内や、民間の支援団体である「ヤングケアラープロジェクトいしかわ」が主催する「ヤングケアラー＆若者ケアラーカフェinいしかわ」という、ケアを必要とする家族がいる方で年齢が10～30代までの方を対象とした集まりの案内についても例示した。さらに、ヤングケアラー・若者ケアラーに関連するウェブサイトの例として、こども家庭庁や一般社団法人日本ケアラー連盟のウェブサイトの他、対象者別（親、兄弟姉妹等）や障害種別（精神障害、発達障害、聴覚障害、疾患等の家族の障害種別を限定した団体及び種別を問わない団体）の各団体の名称及びウェブサイトのURLを複数提示した。これらは、調べ学習を行う中でより多くの元ヤングケアラーの語りに触れてもらうことや活動を知ってもらうことを目的として設定したものである。

４．倫理的配慮

本研究は、一般社団法人日本社会福祉学会の研究倫理指針に基づいて実施している。北陸学院中学校の担当教員より、生徒氏名を匿名化した上で、調べ学習の成果発表及び関連するデータを使用することの承諾を得ている。

Ⅲ．成果発表の分析

１．成果発表の概要

成果発表の内容は、表１及び表２にまとめている。

表１では、調べ学習の成果発表の概要についてまとめた。「班のテーマ」及び「グループ毎のテーマ」の名称は、原文の通りである。内容については、分析に影響を与えない範囲で筆者が補足している箇所がある。成果発表の出典については、ポスターから確認できたグループのみ記載している。グループによって、URLのみ、ウェブサイトの名称のみ、URLと名称の両方を記載しているグループに分かれた。URLのみのグループについては、筆者が調べ、補足している。今回の出典は全てウェブサイトを調べたものだと考えられたが、該当のウェブサイトのトップページのURLのみ記載し、関連するページが不明なグループもあった。その場合は、「出典の詳細不明」と表記している。

表２では、調べ学習の成果発表に対する各グループでの考察及び感想についてまとめた。グループによって、全員でひとつの考察、感想をまとめているグループと、一人ずつ考察、感想をまとめているグループ、その両方をまとめているグループに分かれた。一人がまとめた考察、感想については、文章の冒頭に一人ずつ「・」を付けて表記し、区別している。さらに、A班の「ヤングケアラーはいつから問題になったのか」、E班の「相談支援」については、該当ポスターにおいて

は、グループの人数より少ない人数分の記載しか確認できなかった。確認できたもののみ、記載している。F班の「イギリスの現状・取り組み」については、イギリスの箇所にアメリカと記載されていたが、原文の通り記載している。

２．成果発表以外の取り組み

調べ学習による成果発表の他にも、ミッション祭当日は、教室の中で、「展示に関するクイズ」と題した、ヤングケアラーに関するクイズが設定されていた。「小学生以下」、「中高生」、「大人向け」に分けての出題がなされていた（図２）。生徒による、ヤングケアラーに関心を持ってもらうための工夫の一つとして設定されたという。

中学校の正面玄関に、共同制作の「折り鶴アート」が展示された（図３）。生徒全員が関わり、ヤングケアラーの幸せ、健康の祈りが込められた折り鶴でのモザイクアートが制作された（北陸学院中学校 2023）。

さらに、ミッション祭でのソフトクリームの売り上げや献金を、首都圏にある民間のヤングケアラー支援の法人へ寄附する企画もなされていた。

図３　共同制作の「折り鶴アート」
（2023年９月１日筆者撮影）

Ⅳ．考察

調べ学習の成果発表について、６つの班のうち、４つの班は日本におけるヤングケアラーの現状や施策について、２つの班は海外のヤングケアラーの現状や施策について取り上げていた。前者では、ヤングケアラーになる理由や社会問題化した背景、全国調査や自治体調査の概要、ヤングケアラーを対象とした支援の具体例などについて取り上げられていた。後者では、イギリス、オーストラリア、アメリカ等のヤングケアラーの現状や支援の具体例などについて取り上げられていた。

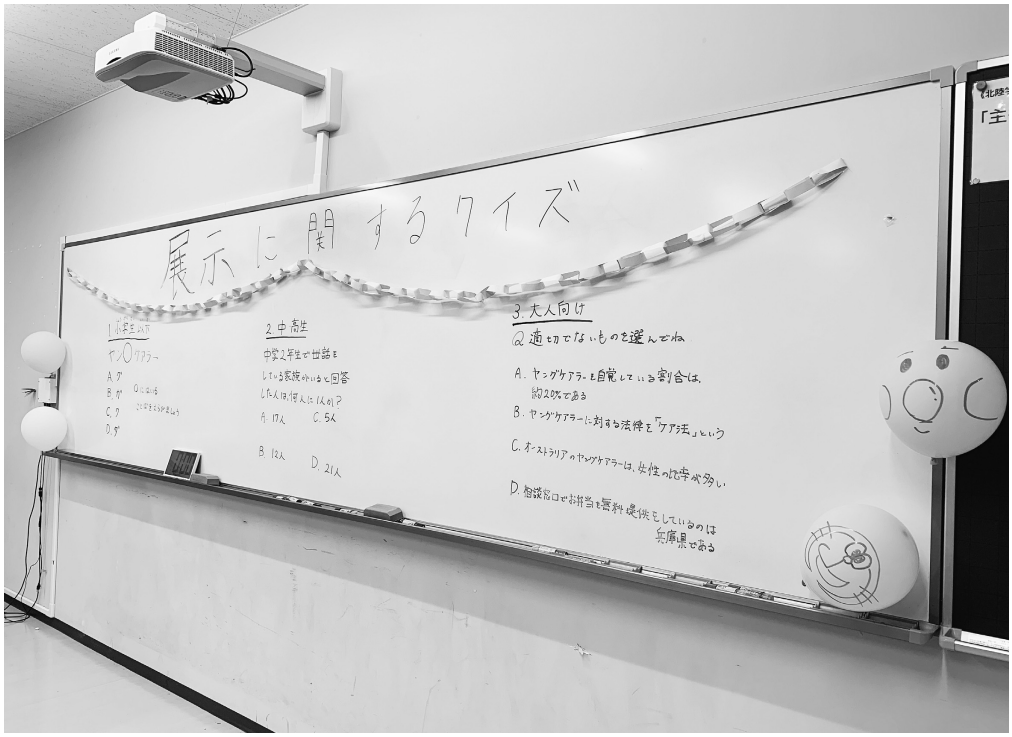

図２　「展示に関するクイズ」
（2023年９月１日筆者撮影）

グループ毎にテーマを設定して調べ学習を行い、どのテーマを取り上げるかによって、ヤングケアラーの実態及び支援の現状への理解に偏りがみられた。例えば日本の取り組みを調べたグループでは、日本でも支援が広がりつつあることへの安心感に言及されているものもあった一方で、海外の取り組みを調べたグループでは、日本の支援が遅れているという視点に立った考察が複数みられた。海外での取り組みを調べたグループでは、日本での取り組みを矮小化してみる傾向にあり、日本国内で海外と同等の支援が行われていても認識しづらくなることが考えられた。

傾向として、ヤングケアラーに関する理解の偏りがみられた。A班のグループ「ヤングケアラーになる原因」では、「ヤングケアラーは、（ケアを）別にやりたくてやっているわけでもない」と言及しているが、その根拠は不明瞭であった。また、A班やB班の考察及び感想で、ヤングケアラーをなくす／減らすことを理想とする言及が複数みられた。このような背景で、共同制作の「折り鶴アート」に取り組んだ場合、ヤングケアラーを憐みの対象、被害を受けた存在として捉えた者もいることが想定される。

また、調べ学習に取り組む際、国や自治体が運営するウェブサイトだけでなく、民間企業等が運営するウェブサイトにアクセスする傾向がみられた。民間企業がまとめているヤングケアラーの概要には、ヤングケアラーの中に、障害や疾患のある人のきょうだい、障害や疾患のある親がいる子ども等、立場毎にピアサポートグループが運営されていること等に言及しているものはほとんどみられない。ヤングケアラーという言葉で包含することにより、多様な家族構成が見えにくくなっているのではないかと考えられる。さらに、民間企業独自の視点が介入してまとめられている可能性があるため、ヤングケアラーに対する理解が偏る可能性がある。

今後、北陸学院中学校や他校で同様のテーマで調べ学習の機会が設けられ、事前学習を行う際には、各グループが調べたことへの相互理解がより重要であること、ヤングケアラーは一人の生徒という立場では他の児童とも同じであり、憐みの対象と捉えることを望んでいる者は少ないこと、アクセスを推奨するウェブサイトの特徴について、言及する必要がある。

Ⅴ．今後の課題

今回の研究対象であった北陸学院中学校では、別途、弁論部による企画を予定している。筆者は、弁論部が採択された「子どもの夢実現サポート事業」（石川県健民運動推進本部）に指導者として関わりを持つ。本事業は、石川県から助成を受け、弁論部の生徒が、障害児者のきょうだい支援団体や児童相談所や市議等への聴き取り、全校生徒を参加対象としたパネルディスカッションの開催等を企画し、きょうだいへの理解を深めることを目的とする。本事業の一環で、2023年９月、筆者が代表を務める「北陸きょうだい会」（ピアサポートグループ）のイベントで、「きょうだいとして中高生に伝えたいこと」をテーマに、成人のきょうだい同士で意見交換を実施した。このイベントで得た知見等を元に、生徒に対し指導を行い、同年12月のパネルディスカッションに活用できるようにサポートする。

パネルディスカッションの聴衆は、今回の調べ学習に取り組んだ全校生徒である。このように、継続的な企画があることで、ヤングケアラーへの正しい理解が深まると考えられる。

現在は、国が、2022年度から2024年度までの３年間をヤングケアラー認知度向上の「集中取組期間」としていることで着目されているが、限定的なものにならないように、期間終了後も継続的に進められ、認知度だけでなく理解の方法のあり方についても検討する必要がある。

さらに、北陸学院中学校はキリスト教育を実践している学校であり、道徳科目は設けられていない。公立校と私立校の配置科目による教育内容の違いがヤングケアラーの理解度に影響を与えるかの検討等については、今後の課題である。

〈参考文献〉

北陸学院中学校（2023）『ミッション祭2023レポート』（https : / / www. hokurikugakuin. ac. jp / sj / life / festival. html，2023年11月１日閲覧）

石川県（2022）『ヤングケアラーの実態に関する調査結果報告書』（https://www.pref.ishikawa.lg.jp/kosodate/young

-carer/young-carer.html，2023年11月１日閲覧）
厚生労働省（2021）『ヤングケアラーの支援に向けた福祉・介護・医療・教育の連携プロジェクトチーム　第４回会議資料』（https://www.mhlw.go.jp/content/11907000/000779902.pdf，2023年11月１日閲覧）
三菱UFJリサーチ＆コンサルティング（2021）『ヤングケアラーの実態に関する調査研究 報告書』（令和２年度子ども・子育て支援推進調査研究事業）（https://www.murc.jp/wp-content/uploads/2021/04/koukai_210412_7.pdf，2023年11月１日閲覧）
埼玉県（2022）『令和４年度ヤングケアラーサポートクラスの実施について』（https://www.pref.saitama.lg.jp/f2218/news/page/news2022070101.html，2023年11月１日閲覧）

謝辞

本稿では課題にも言及しましたが、北陸学院中学校における日々の業務に加え、「ヤングケアラーについて調べたい」という生徒の思いを尊重され、文化祭での企画として取り込み、実施されるまでの過程は大変であったことは認識しています。企画・運営して下さったご担当の先生方をはじめ、一生懸命取り組まれた生徒の皆様にも感謝申し上げます。

表１　調べ学習の成果発表の概要

班	班のテーマ	グループ毎のテーマ	グループ毎のテーマの主な内容及び出典	担当生徒数
A	なぜヤングケアラーは現れてしまうのか	ヤングケアラーになる原因	・ケアをしている理由 ・続柄別にみた介護が必要になった理由 出典：Spaceship Earth「ヤングケアラーとは？現状や原因、日本の支援と取り組み、私たちにできること」 https://spaceshipearth.jp/young-carer/ 埼玉県ケアラー支援計画のためのヤングケアラー実態調査結果 https://www.pref.saitama.lg.jp/documents/187028/youngcarer.pdf	４名
		ヤングケアラーはいつから問題になったのか	・ヤングケアラーとは ・ヤングケアラーという言葉が誕生した時期 ・ヤングケアラーの存在が社会問題化された時期	６名
		なぜヤングケアラーは増えてしまうのか	・ヤングケアラーの増加理由について、ひとり親世帯の増加、晩婚化、専業主婦の減少、核家族化、地域住民との関係性の希薄化の５つに分けて説明	６名
B	ヤングケアラーに対する、世界各国の対策	イギリスのヤングケアラー支援	・ヤングケアラーの言葉の発祥 ・イギリスの支援レベル ・イギリスの支援（民間支援、公的支援） 出典：NHK首都ナビWEBリポート「ヤングケアラー支援の先進地イギリス　ソール･ベッカー教授に聞く」 https://www.nhk.or.jp/shutoken/wr/20210430yc.html 情報・知識＆オピニオン　imidas（集英社）「若年介護者『ヤングケアラー』の言葉を聞く～家族介護とどう向き合うか～」	5名

班	班のテーマ	グループ毎のテーマ	グループ毎のテーマの主な内容及び出典	担当生徒数
			https://imidas.jp/jijikaitai/F-40-180-19-05-G626 介護情報メディア　ケアケア「ヤングケアラー先進国のイギリスの実情は？事例を挙げてご紹介！」 https://c4c.jp/carers/knowledge/youngcarer-england/	
		オーストラリアのヤングケアラー対策	・ヤングケアラーの言葉の誕生（イギリス） ・オーストラリアの総人口に占めるケアラーの割合 出典：木下康仁（2013）「オーストラリアのケアラー（介護者）支援」国立社会保障・人口問題研究所編『海外社会保障研究』（184），57-70. https://www.ipss.go.jp/syoushika/bunken/data/pdf/19857506.pdf	５名
		ヤングケアラーに対するアメリカの対策について	・アメリカのNPO団体　American Association of Caregiving Youthの取り組み（精神面の取り組み、教育面の取り組み）	６名
C	ヤングケアラーとは一体どのような立場なのか	ヤングケアラーについて	・ヤングケアラーの定義 ・ヤングケアラーの全国調査の概要 ・ヤングケアラーのための相談窓口、支援団体の存在及びその効果 出典：厚生労働省　ヤングケアラーについて https://www.mhlw.go.jp/young-carer/ （筆者注：現在は厚生労働省から子ども家庭庁のホームページに移管）	５名
		ヤングケアラーの人の思いは	・「解決してもらおうと思っていない」という思い ・「周りに自分の気持ちを出すことが少ない」という状況 ・「何かを相談しようとは思いつかなかった」という思い 出典：NHK https://www.nhk.or.jp/shutoken/wr/20211122/yc.html （筆者注：2023年11月１日現在は該当ページ削除済） 厚生労働省　ヤングケアラーについて http://mhlw.go.jp/young-carer/interview/ （筆者注：現在は厚生労働省から子ども家庭庁のホームページに移管） Yahoo！ニュース https://news.yahoo.co.jp/（中略） （筆者注：2023年11月１日現在は該当ページ削除済）	６名

班	班のテーマ	グループ毎のテーマ	グループ毎のテーマの主な内容及び出典	担当生徒数
		ヤングケアラーはどんなことをしているのか	・ヤングケアラーの定義 ・ヤングケアラーがしていること（家族の世話、家事、労働） 出典：社会をもっとよくする世界のアイデアマガジン　IDEAS FOR GOOD「ヤングケアラーとは・意味」 https://ideasforgood.jp/glossary/young_carer/ 厚生労働省　ヤングケアラーについて https://www.mhlw.go.jp/young-carer/	６名
D	日本のヤングケアラーの状況	日本のヤングケアラーの実態	・中学２年生「世話をしている家族がいるか」「世話の頻度」の回答結果 ・高校２年生「世話をしている家族がいるか」「世話の頻度」の回答結果 出典：文部科学省　ヤングケアラーに関する調査研究について	４名
		ヤングケアラーについて―埼玉県の状況―	・埼玉県の高校２年生のヤングケアラー実態調査より、ヤングケアラーの比率、ケアの頻度に関する調査の回答結果（2020年実施分） 出典：NHK首都圏ナビ（出典の詳細不明）	４名
		兵庫県のヤングケアラーについて	・兵庫県における小、中、高校生の中でのヤングケアラーの割合の比較 ・ヤングケアラーであると自覚している人の割合 ・ケアの相手 ・ケアの理由 ・ケアの内容（中学生のケアでは、きょうだいのケアが多いという分析） ・ケアの頻度 ・ケアによる生活への影響 出典：兵庫県ケアラー、ヤングケアラーの実態に係る福祉機関調査について（概要）R３年 ・兵庫県の支援体制 出典：兵庫県ホームページ	５名
		石川県のヤングケアラーの状況	・石川県における令和４年調査の概要（世話をしている家族の有無、世話の頻度） 出典：石川県「ヤングケアラーについて」 https://www.pref.ishikawa.lg.jp/kosodate/young-carer/young-carer.html	３名
E	ヤングケアラーに対する日本の対策	早期把握	・ヤングケアラーの現状（令和２年度調査の中学２年生における、世話をしている家族がいると答えた人の割合） ・ヤングケアラーの見分け方（子どもの権利侵害の視点から） ・アセスメントシートの概要 ・厚生労働省の取り組み（YouTubeでの広報、オンライン交流イベントの開催）	５名

班	班のテーマ	グループ毎のテーマ	グループ毎のテーマの主な内容及び出典	担当生徒数
			出典：『【特別対談】貫地谷しほり×元ヤングケアラー　―ヤングケアラー「ほんとのきもち」―』（YouTube） https://www.youtube.com/watch?v=iKYgIm3HvlQ	
		相談支援	・日本のヤングケアラー支援の取り組み（スクールソーシャルワーカーの配置、社会的認知度の向上） ・自治体での取り組み（埼玉県、群馬県の事例）	４名
		家事育児支援	・スクールソーシャルワーカーの支援内容 ・ヘルパーの派遣における支援内容 ・国が取りまとめた支援策（研修の推進、オンライン、スクールソーシャルワーカーの配置支援、民間学習支援事業と学校の連携促進） 出典：大分市（出典の詳細不明） https://www.city.oita.oita.jp/ Spaceship Earth「ヤングケアラーとは？現状や原因、日本の支援と取り組み、私たちにできること」 https://spaceshipearth.jp/young-carer/ 早稲田大学（出典の詳細不明） http://www.waseda.jp	４名
		介護サービス	・介護サービスが必要な理由 ・介護サービスの具体的な対策 出典：NHK（出典の詳細不明） https://www.nhk.or.jp/ 公益財団法人日本財団「ヤングケアラーと家族を支えるプログラム」 https://youngcarer.jp/ ケア求人ナビ（出典の詳細不明） https://fukushi-job.jp/ 株式会社ニッセンライフ（出典の詳細不明）https://www.nissen-life.co.jp/	４名
F	世界のヤングケアラーの状況	イギリスの現状・取り組み	・イギリスのヤングケアラーの人数 ・イギリスで支援を受けたことのあるヤングケアラーの人数 ・イギリスでの取り組み：ヤングケアラーの見つけ方、支援方法 出典：介護情報メディア　ケアケア「ヤングケアラー先進国のイギリスの実情は？事例を挙げてご紹介！」 https://c4c.jp/carers/knowledge/youngcarer-england/	6名

班	班のテーマ	グループ毎のテーマ	グループ毎のテーマの主な内容及び出典	担当生徒数
		オーストラリアの現状・取り組み	・オーストラリアにおけるヤングケアラー支援の対象年齢 ・オーストラリアにおけるヤングケアラーの認識、研究の増加 ・ヤングケアラーを対象としたインターネットでの情報発信の概要 ・男女別のケアラーの年齢、比率	６名
		各国の支援	・ヤングケアラーが多い国（イギリス、オーストラリア、スウェーデン、ノルウェー等） ・各国の支援状況（イギリス、オーストラリア、ドイツ）	５名

表２　調べ学習の成果発表に対する各グループでの考察及び感想

班	グループ毎のテーマ	考察、感想の抜粋
A	ヤングケアラーになる原因	私たちの知らないところで、家庭にケアを担っているという現状に、おどろきました。ヤングケアラーは、別にやりたくてやっているわけでもないので、その人たちの心の中では、実際にどう思っているのか、気になりました。
	ヤングケアラーはいつから問題になったのか	・ヤングケアラーが少しでも減ったらいいなと思いました。 ・ヤングケアラーについて知るいい機会だと思った。 ・改めて、ヤングケアラーの事について知れて良かったです。今後この問題が解決するといいなと思います。 ・ヤングケアラーを減らすために１人で抱え込まないようにする環境をつくることが大切だと考えました。 ・ヤングケアラーに対する支援が早く行われるといいなと思います。
	なぜヤングケアラーは増えてしまうのか	ヤングケアラーを少しでも多く減らしていこうと思いました。ヤングケアラーのためにできる事をしていこうと思いました。人々をヤングケアラーにしないために努力しようと思いました。
B	イギリスのヤングケアラー支援	イギリスには約100万人もいるのに支援を受けているのは約５万人しかいないことに驚いた。また、イギリスは日本よりもヤングケアラーに対する支援が進んでおり、このような取り組みが世界に広がるときっと良い世の中になると思った。ヤングケアラーについて、ミッション祭で少しでも多くの人が知ってくれたらいいな、と思った。 ・ヤングケアラーの理解をより深めることができました。 ・ヤングケアラーへの支援への状況がよく分かりました。 ・イギリスが、ヤングケアラーに様々な支援を行っている事が分かった。日本はまだ支援が進んでいないため、イギリスを見習う所があると思いました。 ・ヤングケアラーの先進国と言われるイギリスでも、支援を受けている人数は全体の５％ほどしかないのでとてもおどろきました。 ・イギリスの状況を知って、日本も見習わないといけないと思いました。 ・ヤングケアラーの先進国がイギリスだと思っていなくて、色んなことが知れました。

班	グループ毎のテーマ	考察、感想の抜粋
	オーストラリアのヤングケアラー対策	オーストラリアのヤングケアラーについてはあまり知らなかったけど、模造紙にまとめたことで現状やきっかけなどを深く知ることができて良かったです。
	ヤングケアラーに対するアメリカの対策について	アメリカでは、ヤングケアラーに対して、精神的なケアと教育面でのサポートと同時に行っている。日本もこのような取り組みを参考に、ヤングケアラーをサポートすべきだと思う。
C	ヤングケアラーについて	ヤングケアラーは、周りから知られていないだけで、本当は多くの子ども達がヤングケアラーであるということが分かりました。
	ヤングケアラーの人の思いは	このようにして、社会に自分がヤングケアラーであるということが隠されていくと思う。このことを調べて、大切に接してあげることや社会について考えを広げていくことが大切である。ヤングケアラーにとっては誰かに打ち明けることは難しいかもしれないが、前よりも視野が広がった社会であるから、きっと誰かは力になってくれると思う。ヤングケアラーは今現在、自分たちの周りにいるかもしれない。だから、私たちは話を聞いて寄り添ってあげたいと思う。共感してあげる言葉をかけてあげたい。そして、その子たちの癒やしになっていればいいと思う。
	ヤングケアラーはどんなことをしているのか	ヤングケアラーは生活の中で友達と遊ぶ時間がなくなったり、学校に行けなくなったり、ストレスを抱えてしまうことが多数あります。ヤングケアラーの負担を減らせる社会になるようにまず私たちはヤングケアラーを知っていく必要があると思いました。
D	日本のヤングケアラーの実態	今、この中学生や高校生が大人になるにつれどのようになるのか疑問に思いました。私たちは、ケアの相手は、兄弟が減り、祖父母が増えると考えました。よって、ケアから解放されることはないと考えます。
	ヤングケアラーについて ―埼玉県の状況―	ケアラーにならないと分からないことも多いと思いました。ケア頻度を答えない人もいたのであまりケアについて話したくない人も多いのかもしれないと考えました。
	兵庫県のヤングケアラーについて	私達と同世代なのにきょうだいのケアのために学校にも行けないのは大変だと思いましたが、兵庫県ではヤングケアラーに対する理解が広まっていることがわかりました。
	石川県のヤングケアラーの状況	小学６年生のヤングケアラーの割合が大きいので、小学６年生のヤングケアラーを支えるために自分達にできることがあればやりたいなと思いました。
E	早期把握	・ヤングケアラーが、想像よりも多いことに驚いた。もっとヤングケアラーのことが社会に広まって、早期発見が進むといいと思う。 ・ヤングケアラーを調べて､早期発見ができていないことにおどろいた。 ・私は今回ヤングケアラーの早期把握を調べました。さまざまな方法があったのですが、それでもヤングケアラーを把握するのは難しいことだと思いました。 ・今回ヤングケアラーについて調べてみて、とても多くの子供が学校に行けず家で介護をしていると知っておどろきました。早期把握をするためにアセスメントシートを活用しているなど知らないことがたくさんありました。 ・国からも支援がある事を初めて知って驚きました。自分の身の回りにも同じような状況下に置かれている人がいたら、積極的に手伝ってあげたいと思いました。

班	グループ毎のテーマ	考察、感想の抜粋
	相談支援	・ヤングケアラーについて調べる機会があり、ヤングケアラーの大変さや実態についてよく分かり良い経験になりました。 ・ヤングケアラーの人達がどれだけ大変なのか調べることができました。もし募金などがあればしたいです。 ・ヤングケアラーが大変な思いをしながら介護をしていることが分かりました。
	家事育児支援	・もし自分がヤングケアラーになっても日本には沢山の支援があり、とても温かい国だと思いました。 ・まだ知名度が低いヤングケアラーにも、支援をしてくれる人々がいて安心だと思いました。 ・ヤングケアラーは大変だけど、そんなヤングケアラーにも手を差しのべてくれる人がいてよかったです。 ・ヤングケアラーを助けてくれる優しい人や団体がいるという事を初めて知りました。私も、大人になったら、困っている人を助ける活動に貢献できるようになりたいです。
	介護サービス	ヤングケアラーに介護サービスが必要な理由が分かった。沢山のサービスを提供して、ヤングケアラーを支えているのだと思った。
F	イギリスの現状・取り組み	今回、この調べ学習を通して、ヤングケアラーについて理解を深めることができて良かったです。 アメリカはヤングケアラーの子供達が抱える精神的疲労やストレスをケアする対策を行っていて、日本もその対策を参考にヤングケアラーに対する支援やケアを行うべきであると思う。 アメリカは、ヤングケアラーに対して、精神的なケアと教育的なサポートを同時に支援していて、ヤングケアラーが普通の人と同じ生活が出来るようになっていてすごいなと思った。 (筆者注：「アメリカ」も含め原文ママ)
	オーストラリアの現状・取り組み	ケアラーがやや高齢層が多いように感じたが、ヤングケアラーの数に対してその世話等をするケアラーの数が多いので、安心できる。男女関係なく若年層の数が少ないように感じた。このまま行くと、ヤングケアラーの全体の数は減少すると推定できる。減少を防ぐためには、今より多くの若者がケアラーになる必要があると思う。
	各国の支援	・日本でもいち早く支援が行われるといいなと思いました。 ・世界中のヤングケアラーの人達が早く認識され、支援されるといいなと思いました。 ・イギリスには100万人もヤングケアラーがおり、「ケア法」が定められていることに驚きました。 ・イギリスの法律までつくってヤングケアラーを助けようとする姿勢を日本も行うべきだと思いました。 ・日本でも、イギリスのような進んだ支援が受けられるといいと思いました。